

Title	ボゴタの教養スペイン語における英語借用語
Author(s)	村上, 陽子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58795
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	村上陽子
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第62号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ボゴタの教養スペイン語における英語借用語
論文審査委員	主査 教授 出口 厚 實 副査 教授 伊藤 太 吾 副査 教授 小矢野 哲 夫 副査 教授 木内 良 行 副査 名誉教授 中岡 省 治

論文の内容要旨

本研究はコロンビアの首都ボゴタの教養スペイン語に見られる英語借用語を研究対象とし、その言語的特徴を分析して記述し、分析結果を指標として定着度を測定することを目的とする。公的文書など知的世界で最も通用しており、多くの場合、話者が模範として参考にするのが都市部、とくに首都の教養層の言語であるという理由から、都市に居住する教養層の話者をインフォーマントとして、フォーマルな場面とインフォーマルな場面の両方における話し言葉の規範を探る必要がある、として1964年に「スペイン語圏主要都市における口語教養語規範に関する共同研究プロジェクト(Proyecto de estudio coordinado de la norma lingüística culta del español hablado en las principales ciudades del mundo hispanico)」が立ち上げられた。このプロジェクトに基づいて、メキシコ・シティ、マドリード、サン・フアン、サンティアゴ・デ・チレ、カラカスのスペイン語圏主要5都市において作成された教養語の語彙集に見られる英語借用語についていくつかの研究がなされてきた。しかしながら、同様の語彙集のあるボゴタについてはいまだその種の研究が行われていないため、その空隙を埋めたいと考えたことが本研究の動機のひとつである。

借用語は複数の言語が直接、または間接的に接触しておこる言語干渉の現象のうちの一つである。ボゴタの教養スペイン語における英語借用語は、征服や移民など他言語を用いる文化圏の話者との、時に強制的な直接接触により引き起こされた言語干渉ではなく、他言語文化圏から新しい事物や概念が流入してくる際に起きた間接接触により生じた現象である。また、多くの研究者が論じてきているコードスイッチとは異なり、借用とは言語要素がある程度安定した状態で保存される現象であり、それが語彙的借用であれば話者の母語の語彙体系に新たな要素が付け加えられることになると言われている。しかしながら、借用語の中にも話者の個人的な使用であると考えられるような一時的な語句もあるとされており、ボゴタの教養スペイン語に見られる英語借用語の中ではどれがそういった語句であるのか区別をするため、定着度の測定を試みることも研究目的としている。

スペイン語における英語借用語に関して行われてきたさまざまな先行研究から、一口に英語借用語といってもさまざまな種類があることが分かったが、本研究では英語から記号表現、記号内容の両方が取り入れられ、英語の形式をそのまま保存しているか、もしくは何らかの書記変化を加えられている語彙的な借用語を研究対象とする。英語表現をスペイン語で置き換える「なぞり」や翻訳と呼ばれる現象も英語借用語の一部であるが、本研究においてはスペイン語がそういった段階を経していない外来要素をどのような方法でスペイン語のなかに受け入れているかを理解するため、語彙的な借用語を対象とする。

Léxico del habla culta de Santafé de Bogotá (1997)「サンタフェ・デ・ボゴタの教養語の語彙」から語彙的な英語借用語を選出した結果、本研究のデータは総数 849 語、異なり語数 289 語にのぼる。上記の語彙集の作成に協力した 25 名のインフォーマントによる使用人数を指標としてこれらの英語借用語の使用頻度について分析し、英語借用語が出現していた意味分野、書記・音声的側面、合成と文法的性、複数形といった形態・統語的側面の特徴を提示し、これらの分析から明らかになった特徴を定着の指標とみなして定着度を測定する。

使用頻度の分析から判明することは、一人のみのインフォーマントによって使用されていた語が研究対象の全体の 30%にのぼり、さらに、いくつかの研究において散発的で一般的でない英語借用語であるとみなされてきた、インフォーマントの 25%以下によってしか使用されていない英語借用語が全体の 6 割を占めるということである。また、語彙集において使用頻度の高かった英語借用語はボゴタのスペイン語にのみ特徴的な語句ではなく、多くのスペイン語圏における使用語彙を網羅しているとされているいくつかの西辞典に立項されていることが確認でき、スペイン語圏において一般的に使用される語であるといえる。

上記のボゴタの教養スペイン語の語彙集は 21 の意味分野ごとに語彙を分類しているが、その意味分野のうち最も多くの英語借用語を含んでいたのは「社会生活・娯楽」であり、ついで「交通と旅行」「食物」「衣類」という分野が並ぶ。反対に使用が少ないのは「時間・年代」「土地」「動物・牧畜」「人体」であった。英語借用語を多く含むこれらの分野は新しい事物や概念を他言語文化圏から受け入れやすい分野であると言え、また、25 名のインフォーマント全員が使用している語が多く、話者の使用が定着している必要な語句を多く含む分野でもあることが分かる。

英語借用語の書記的側面に関しては、なんの書記変化も加えられることなく英語形式が保存されている語と、なんらかの書記変化を加えられている語がコーパスには存在している。書記変化は、スペイン語の書記規範に一致しない綴りを修正するため、よりスペイン語的な語形式にするため、できるかぎり英語の発音を保存するため、という三つの要因によって起きていることが分析から明らかになった。音声的側面については、コーパスのもととなった語彙集に音声に関する記述のある語だけを対象にしたが、音声的現象のなかには書記的分析で明らかになった現象が観察され、二つの分析レベルで起きた現象は互いに裏付け合っていた。また、書記的側面と使用頻度との関係について分析を行った結果、英語形式が保存された語は低頻度に集まっており、スペイン語の書記に同

化するように変化が加わっている場合でも、書記規範に不一致な部分を含む語の多くは低頻度を示していた。高頻度の英語借用語には書記変化を経ている語が含まれる割合が高いが、スペイン語への書記的な同化を示している語のなかにも、頻度が低くインフォーマントに広く認知されていない語も存在した。

英語借用語の形態・統語的側面の分析では英語借用語をもとにした合成と文法的性、複数形に関して扱ったが、合成については英語借用語にスペイン語の接辞や語などが加えられて作られた合成語が名詞、形容詞、動詞という三つの品詞にわたって 44 語見られた。これらの合成語を観察すると派生や複合という変化の前に、スペイン語の書記規範に一致するよう書記変化が加えられている場合がほとんどであり、そこにスペイン語の接辞や別の語が付加されているため、スペイン語の書記規範に一致した綴りをもつ語となっているのだが、使用頻度との関係について分析してみると 7 割の合成語は決して使用頻度が高くないことが分かった。書記・音声的側面の分析においてと同様、書記変化を加えられスペイン語の書記規範に一致している英語借用語が必ずしも使用頻度が高いというわけではない、という見解に達した。

英語借用語の文法的性に関する分析では、独自のインフォーマント調査の結果、男性が形態・統語的に無標であり、女性が有標であるというスペイン語の特性が英語借用語の文法的性の決定に際しても影響を及ぼしており、女性名詞を示す語尾 *-a* や *-ción* をもたない無生物名詞に付与する文法的性には男性が選ばれていた。女性名詞を示す特徴がないのに女性名詞であるとの回答を得た語は 2 語しかなかったが、無生物名詞で文法的性の揺れを示した語とあわせて、何が要因となって女性を選択されたのかを考えてみると、各英語借用語の訳語が想起され、その文法的性からの類推で女性名詞であるとの認識が生まれたと考えられる。

英語借用語はどのような複数形になり、何がその決定要因となっているのかを文法的性の場合と同様、独自のインフォーマント調査を行って分析を試みた。その結果、複数形の決定要因はほとんどの場合、語の書記的側面であることが判明した。スペイン語の書記規範に一致している語では、母音で終わる語には *s* が、子音で終わる語には *es* が付加され、また強勢をもたない母音に語末の *s* が続く、たとえば *tenis* のような語では複数形態素はゼロ形で実現され、定冠詞の複数形が複数性をマークするという、通常の複数形成と同様の傾向が見られた。反対に、スペイン語の書記規範に一致しない語に関しては、母音で終わる語はコーパスでは確認できなかったが、子音で終わる語ではスペイン語の複数形の規則に反して *s* が付加されるという傾向が見られた。このような子音で終わる語に *s* が付加される現象やいくつかの方法の間での揺れは、先行研究の記述から判断すると、これらの語がスペイン語に同化しておらず、外国語であることが意識されている語であると考えられる。

上述の使用頻度といくつかの言語的側面に関する分析の結果を定着度の指標として英語借用語の定着度の測定を試みた。容易に予想されるように、英語借用語すべてが同じ定着度を示しておらず、本研究の研究対象にはしっかりとスペイン語に定着した語は少なく、反対に定着の度合いが低い語

が全体の6割を占めているという結果を得た。定着度は借用語が受け入れられた言語においてどのような立場にあるかを明確に示す総合的な尺度であり、英語など他言語からの語彙が日常生活の表面的な部分に増えるのを目撃して、スペイン語の言語的統一を危惧するといった借用語研究に少なからず見られる姿勢は定着度を考慮することで修正されるのではないだろうか。

定着度の高い英語借用語は英語圏から取り入れられたスポーツや娯楽関連、交通関連の事物を表す語であった。これらはそのほかのスペイン語地域においても一般的な英語借用語であり、スペイン語語彙の空白を埋める必要な英語借用語であると言えるだろう。本研究において定着度が高いとも低いともいえない中間的な英語借用語は、時間とともにより定着が進んでいくか、または使用されなくなっていき、スペイン語の語彙から消滅していくという二つの可能性をはらんだ語である。1980年代後半のインフォーマント調査によって作成された語彙集において中間的な定着度に分類されていたのに、本研究で実施した独自調査に協力した現代のインフォーマント全員によって認知されていた語は、十数年の時の流れとともにその使用が定着した語といえ、また、現代のインフォーマントが一人として使用すると回答しなかった語は、ボゴタの教養スペイン語の語彙からは消滅してしまっただと考えられる英語借用語である。定着度はこのように、英語借用語の現在の状況を示し、今後の状況に関する暗示を含んでいるといえるのではないだろうか。

論文審査の結果の要旨

本論文は、南米コロンビアの首都ボゴタのスペイン語に見られる英語借用語を多面的に分析したものである。考察の対象として、地元の母語話者に対して行われたインフォーマント調査の報告書「サンタフェ・デ・ボゴタの教養語の語彙」(1997)が中心に採りあげられ、これを補完するために筆者自身による独自の質問票調査も追加されている。同書は、スペインと中南米にまたがる国際学術研究「スペイン語圏主要都市における口語教養語規範に関する共同プロジェクト」の一環を構成するべく、共通の基準のもとに実施されたアンケートをまとめたものである。他の主要都市についてはすでに英語借用語の研究が進んでいるが、ボゴタに関してはその語彙集データの分析がなされておらず、村上氏の研究はその空白を埋めようとするところから出発している。

言語現象としての「借用」を正確にかつ精密に記述するために借用語がもつ様々な側面を考慮する必要があるが、とくにその定着度を測定することを重視すべきと考える。すなわち、固有語の語彙体系に組み込まれる同化プロセスの度合いを共時的にとらえ記述することで、定着度を数量的に決定することが可能であると見なしている。また、この種のテーマでしばしば展開される純正主義的な外来語論と一線を画する立場であることも表明する。

第1章、第2章では借用語の定義がなされ、スペイン語における英語借用語に関する先行研究が概観されるほか、対象となる語彙の範囲が規定され、分析方法が詳述される。『ボゴタの語彙集』は高学歴で中・上位の社会階層に属する25名の同市在住母語話者が用いると確認された語彙であり、その中で英語からの直接的借用とみなされる一定の基準に合致する単語総数850語(異なり語数289)を筆者が選出して借用語基本資料としている。

これらの借用語彙に対して第3章～第6章で、その使用頻度、意味分野、表記特徴、形態統語的側面について詳述し、各指標の数的分布を分類カテゴリー別に、また関連研究の

結果と比較して、個別に検討を加えている。借用語の社会的同化の度合いを測る重要な指標である「使用頻度」については、A. Quilis, H. López Morales に従い、ある借用語を使用したインフォーマントの数を5段階に分別して使用頻度とみなす方式を採用する。基本資料中で、1人の資料提供者のみに使用された語が突出して3分の1近くを占め、全員に使用された語(ランク5)の4倍多く記録されたことを観察している。さらに他地域の英語借用語の頻度との対照から、高頻度語がボゴタのスペイン語のみに特徴的な語彙ではなく、スペイン語圏に広く流通し一般辞書にも立項されていることを指摘する。

借用語が属する「意味分野」はPILEIのカテゴリー区分に沿った21種に細分され、使用頻度ランクとの関係、スペイン語圏の他都市の傾向とも比較して分析する。頻度ランク5の借用語では「社会生活・娯楽」範疇に含まれるものが最多で、ほとんどがスポーツ関連の用語であることが判明した。借用語の「表記特徴」については書記・音声面で原語綴字がどの程度の修正を受けているかの弁別基準が論じられ、前出の使用頻度との関連性にも注目している。

「形態・統語的側面」をさらに掘り下げて分析するために、基本資料を補う追加の独自インフォーマント調査を実施して、借用語の「文法的性」及び「複数形成」の処理法を入念に検討し、この面での借用語の特質の解明に取り組む。借用時に新たに付与されなければならない「性」を決定づけるのは、有生物では自然性、無生物の場合はその訳語となる固有単語の文法的性に従うという意味的要因が働くものの、語尾形式が男女別を顕著にマークするときは固有語と同等に扱われると結論している。複数形の形成法に関しては、スペイン語の書記規範に合致した綴りの語は通常の複数形態素が付加され、そうでない語は一律に-sを取る傾向が見られ、伝統的な文法規範から外れるとしている。

第7章は以上のような借用語の特徴づけを統合し、基本資料のすべての、個々の単語のそしてまた種別相互間の座標を見極めるための指標として「定着度」を提案し、測定している。書記・音韻的同化、頻度、合成、多義性、(既存語との)競合の5つの指標の点数化を合計した値である定着度を基準として見れば、対象289語のうち、たとえば、最高の定着度10を示したのは、1語(tenis)のみで、10段階評価の中で0~3の低い定着度をもつ語が全体の6割を占める。また、英語借用語の定着度は単語ごとの個体差が著しいことにも注目している。

本論文の審査においては次の諸点が指摘された。用語法の一部に不正確さが散見されるほか、語彙分類のために用いられた意味基準の曖昧性が未解決のままであること、語の音韻構造・形態論的派生関係の厳密な把握にやや不備があること、言語データを実測する様々な技法をさらに幅広く取り入れて活用する余地が残る点、などである。

以上のような課題が残されることを斟酌しても、総じて、多数の雑多な語彙素材からなる借用語の全体像を解明しようとする論旨は明確で首尾一貫している。埋没して不透明な個別的特長を顕在化させるための特性群を特定する手法は手堅く地味ではあるが、隅々まで目配りの行き届いた観察と整理に基づいた克明な実証性は高く評価される。

また筆者により実施された、英語借用語における文法的性および複数形成法を探るインフォーマント調査は、これまで類似の先例がほとんどなく、その結果は本研究だけでなく今後、借用語の統語面を分析しようとする研究者にも貴重なデータを提供することになる。筆者はこれまでにコロンビアのカロ・イ・クエルボ研究所でのそれを含め10年の研究歴を有し、すでに学会・研究会で本論と相補の関係にある諸テーマでいくつかの発表を行っている。これら一連の研究を背景に本論文は個々の現象を裏付ける丹念な資料調査に傾けてきた氏の地道な努力が実を結んだものと考えられる。スペイン語の地域の変異や外来語に関する考察には、局部の現象の皮相的な印象論の域を出ない軽量の記述が少なくな

い中で、その質・量ともに手応えのある体系的研究としてこの分野の研究深化に十分貢献できるものと判断する。

以上のことを総合的に判断し、本審査委員会は村上陽子氏の博士論文が本学博士学位に相応しい水準の業績であるという結論に達した。